

「柳のまゆひらく」小考

——『蜻蛉日記』における侍の歌の解釈について——

張陵

はじめに

これまでの諸研究によって、『蜻蛉日記』における漢詩文の様々な影響が明らかにされつつある^(一)。『千載佳句』『新撰万葉集』と言った秀句集・詞華集は元より、『白氏文集』『菅家文草』など詩文集、『蒙求』のような初学書、乃至經典の『史記』『詩経』『孔子家語』まで、文章道に生きた文人官吏の家で育った道綱母は広汎に漢文学の教養を持っていたと考えられる。また、その知識は和歌など仮名文学を介した修辭的、引用的なものとされてきたが、実のところ作者あるいは関係人物の心情に結び付きながら、時に和文表現を新たな高度に引き上げる役割を有しているとも考えられる^(二)。しかし、たかが家庭女性であるためか、道綱母が学問としての漢詩文と距離のある存在とされがちで、『蜻蛉日記』の中の漢詩文要素が看過され、表現の意味が誤解されるようなものはまだあるように思われる。本稿は、従来あまり留意されなかった、『蜻蛉日記』中巻冒頭の他者（兼家側の侍）の歌にみられる一つの表現に注目して、その解釈を見直したうえで、道綱母が日記に該当歌を記した真

意に逼ってみたい。

一

中の十日のほどに、この人々、方わきて小弓のことせむとす。かたみに出居などぞ、し騒ぐ。しりへの方のかぎり、ここに集まりてならず日、女房に賭物乞ひたれば、さるべき物やたちまちにおぼえざりけむ、わびざれに青き紙を柳の枝に結びつたり。

山風のまへより吹けばこの春の柳の糸はしりへにぞよる

返し、口々したれど、忘るるほどおしはからなむ。ひとつはかくぞある。

かずかずに君かたよりて引くなれば柳のまゆもいまだ
ひらく

（安和二年（九六九）三月・一七二頁）

まずこの記事までの内容を追ってみたい。日記上巻で夫の浮

気事件（町小路の女）、母親の死去、父親の遠方赴任、姉との別離等を記した道綱母は、兼家との関係において疎外感・孤独感を深めていた。一方、兼家が急病したときに兼家邸に赴いて看病したり、初瀬詣での帰路に兼家の出迎えを受けたりするなど、濃密な夫婦の時間も過ごしたと見える。中巻冒頭は暦が新年（安和二年）になり、その寿歌に道綱母が「三十日三十夜はわがもとに」と詠んで、不安定な夫婦関係を縫っているうちに、下衆の乱闘事件まで起こって、不本意な転居をさせられる。一方で三月三日の節句に、道綱母の侍女が歌を詠んで兼家の従者を招いてささやかな酒宴を開く。三月の中旬に、兼家の従者は小弓の試合をする事になり、その後手組が道綱母邸で練習をすることになった。賞品をせがまれた道綱母側の侍女達は即座に思いつかず、苦慮した末柳の枝に「柳の糸は」の歌を結び付けて遣った。この贈歌に「百歩穿柳」と伝えられる養由基伝を利用してゐることは諸注に指摘されている。ところが、数々の返歌の中から道綱母が摘出した「かずかずに」歌の波線部「柳のまゆも今ぞひらくる」の表現については、あまり注目されなかつた⁽¹⁰⁾。

この歌について、諸注は「柳の眉開く」が漢文風的な表現だと指摘している。しかしその意味については深く追究されていない。今通説になっているのは、上村悦子氏の「いろいろとみなさま方が味方となって引き立ててくださったっているそうですから、柳の芽が開くように私たちの愁眉もやっとな開きました。」とする説⁽¹¹⁾である。一方、和歌の伝統から理解しようとする斎藤菜穂子氏の異論もみえる。それは「まゆ」を「繭」と解し、「くる」をその縁語の「繰る」とみて、さらにその上に「柳の

眉」が掛けられているとみて、一首を「柳の繭が開いて糸が繰り出されるのにあわせて、女性の眉のような「柳の眉」の葉も今こそ開き、春の美しさを鮮やかに」描出したと、重心を自然風景に置く見解⁽¹²⁾である。

前者は「柳のまゆ」を直ちに漢語「柳眉」と結びつけ、「眉開く」という表現を「愁眉が開く」と漢文風的に見ているのに対して、後者は「柳の繭ひらく」とみている。従来の説においては、「柳の眉開く」が漢詩文風であると説明はしているが、その由来を考証することはなかった。斎藤氏は「柳のまゆ」という表現を詳しく調べて、その用例はみな「女性の眉」を示すものであって、従者が自らの眉を「柳のまゆ」と表現するのは考えにくいと主張している。また、『遊仙窟』の例と『田氏家集』「春風歌」、『万葉集』「松浦川に遊ぶ序」を挙げて、「柳の眉開く」の表現は日本漢詩文に存在することを指摘しながらも、それらの例は「愁眉を開く」と読めないため、男性たる従者がこの表現を使って自らの心情を「柳眉開く」をもって表したと解せないという。

侍の歌は自然風景を詠むものか、道綱母の侍女への辞令的返歌か、それとも自らの心情を表すものか、この歌の解釈を明らかにするために、「柳のまゆひらく」という表現を仮名文学と漢文学両方の用例をもう一度遡って調べる必要があると考える。

まず、仮名文学から前例を求めることは困難であった。『蜻蛉日記』以前の仮名文学作品を紐解いても、「柳のまゆひらく」の如き表現は散文部分には見られないし、『蜻蛉日記』以前の和歌にも類似は見出されない。時代が下る『枕草子』に「さか

しらに柳の眉のひろごりて春の面を伏する宿かな(三月ばかり物忌みしにとて)⑤の歌は見えるが、方違えのため、余所の家へ行つたところ、その庭に植えてある柳の葉が細いものでなく、ぶざまに広がっているのを見て、その家までが無風流だと言っているのである。この例は『蜻蛉日記』より後のもので証左にはならないが、漢詩文の機知を随所に表す清少納言の独特な表現とみて留意すべきであろう。

では「ひらく」という要素を取り除いて、まず「柳のまゆ」のみを検証してみる。「柳のまゆ」を詠んだ歌は『蜻蛉日記』以前にも散見される^⑦。

梅の花 折りもてみれば わが宿の 柳のまゆも あはれなるかな

(赤人集・一四九)

青柳の まゆにこもれる 糸なれば 春のくるにや 色まざるらん

(貫之集・三七五)

春の日の 影添ふ池の 鏡には 柳のまゆぞ まづは見えける

(読み人しらず・後撰和歌集・卷三・九四)

これらの歌はいずれも春の風景を詠んだものであり、「柳のまゆ」は「柳の若芽(あるいは葉)」を指すことは明確であろう。なかならず、『後撰和歌集』の読み人しらず歌は、池の水と柳の葉を鏡と眉に譬え、春の風景に美女が鏡に臨む状を想起させる漢詩文風の表現である。また、藤原師氏の私家集である『海人手古良集』に「わぎもこが眉に似たれば青柳のなびくにつけてます涙かな」のような歌もある。春風に靡く柳の細い

枝葉を見て、それに似た恋人の美しい眉を想い出すという。

ほかに類例があるが、歌における「柳のまゆ」は、柳の若芽・葉と理解される例、美人の眉と理解される例のどちらもある。「柳のまゆ」は「柳の繭」とも読むことができ、そこに「眉」を掛け、漢語由来の歌語として早く定着したことは、斎藤氏の指摘したとおりである。しかし「ひらく」という要素の付け加えられた「柳のまゆひらく」のような表現は、歌に求めることができない。

二

次は漢語「柳眉」を調べてみる。漢語「柳眉」について、中国の辞書は「形容女子細長秀美的眉毛」女性の細くて美しい眉の喩え」と説明しているが、日本の辞典にもその意味が一般的であり、柳の葉そのものと説明するのは少ない^⑧。その理由はおそらく、平安知識層に多大な影響を与えた唐代の詩文に於いては、「柳眉」という漢語は美女の細い眉の比喩としての用法が圧倒的に多いからであろう。例えば平安貴族に熟知された「長恨歌」において、楊貴妃の美貌は「芙蓉は面の如く、柳は眉のごとし」と描写され、また、「燕脂漠々として桃花浅く、青黛微々として柳葉新たなり」(白居易・任氏行)の句は『千載佳句』(四四二)にも採られ、広く知られたであろう。

このように、中国の「柳眉」は専ら美女の喩えであることはわかるが、どんな女性に「柳眉」が使われるかを見てみよう。白詩に見える「柳眉」は男性と恋愛をする貴婦や妖婦の眉を指すものである。その一方で、唐から五代まで、「柳眉」が女性

と採った比喩用法と違つて、日本の詩人・歌人の視線はより自然に向けられていることが看取される。『角川古語大辞典』の「柳眉」の項目が最初に「柳の葉、特に萌え出たばかりの新葉を眉に見立てた語」と説明しているのも、以上の中国詩と日本漢詩の傾向の違いを表しているだろう。

日本漢詩文における「柳眉」は自然風景を描写する用例が少なくないことを確認したが、「柳眉」と美人とは全く結び付かないかという点、そうでもない。唐詩のそれとはやや趣向が異なるが、調査によつて日本漢詩文では容貌の喩えである「柳眉」が、夫を待つ女性の愁容を描く、いわゆる閨怨詩に集中して見えることがわかつた。

合歡寂院寧獨忿
萱草閑堂反召悲
可妬桃花徒映靨

合歡の寂院寧ぞ忿を獨かむや
萱草の閑堂も反りて悲を召く
妬きかな桃の花徒らに靨に映ゆること

生憎柳葉尚舒眉
（菅原清公・奉和春閨怨・文華秀麗集・五十一）

桃の花がやたらに綻ぶことは、悲しい我が身にとつて妬ましい、柳が伸び伸びと葉を生やしていることは愁眉を擡める自分にとつて実に憎いと言う。春の明朗な風景は、却つて悲しみに沈む女性の暗い心情を一層際立せる。

君不見妾離別

君見なずや妾が離別を
昼夜吁嗟涕如雪
雙蛾眉上柳葉頰

君見なずや妾が離別を
昼夜吁嗟きて涕雪の如し
雙蛾の眉の上柳葉頰み

千金咲中桃花歇
（巨勢識人・奉和春閨怨・文華秀麗集・五十三）

同じ題目で詠まれた巨勢識人の作も前出菅原清公の詩同様、

夫が戦場に向かわされたため、恩愛を俄かに失つた女の悲しみを描くものである。夫との生き別れを夜も昼も嘆いて、涙が雪の如く降りかかる。番いの蛾のような、柳の葉のような美しい眉を擡め、千金に値する笑みも止んでしまったと言う。類似の詩はまた、巨勢識人が嵯峨天皇御製の「折楊柳」に和した一首に、「楊柳東風の序、千条揺颺の時。辺山の花雪に映り、虚牖の葉眉を嘸む。楼上春簾怨み、城頭曉角悲し。君行きて音信断えぬ、攀折して誰にか寄せむとする」がある。

同時に留意したいのは、以上の春閨怨詩群に見える「柳眉」には、「顰む」が付くことである。唐代駱賓王の「王昭君」詩の「愁の眉、柳の葉顰む」はその源泉に当たるとであろうか。平安貴族は自らの好尚に随い、「柳眉」に閨怨の悲しみを重ねた結果、この表現が「愁眉」と同様な意で使われることが可能になった。

さらに、前掲の菅原清公詩に「生憎し柳の葉尚し眉を舒くこと」とあり、「顰む」の反対語として「舒く」が用いられていることも看過できない。この詩は、「春が来て」柳の葉が舒くことと対照的に、「夫を待つ女性自身の」「愁眉が開かない」ことが暗示されている。これも「柳のまゆ」に女性の「愁眉」の意が読み取れるし、「柳の眉舒く」は自然物の柳を介しながら人物の心情に結び付いている。

一方で、「柳」の要素を取り除けば、漢語「眉開」も日本の漢詩文に少なくない。殊に菅原道真の詩文には多く見られる¹⁹。例えば、「白首 空しく帰らむ恨みを遺さず、請ふ見よ 愁眉の一旦に開くことを」（賀和乎・卷二・一三〇・二二二頁）は進士の及第を祝して、長年落第して憂き目を重ねたが、ついに

宿望を達して恨みを晴らすことをいう。「愁へて戚む、去年手を分ちて出でにしことを、笑ひて容す、今日両つの眉開くることとを」(旅亭歳日、招客同飲・卷三・二百十四・二六七頁)は、道真が讃岐守赴任のため京を離れ、それ以来愁えに響めた眉を、今日だけ明るく開いて笑うことをいう。「歸らむ鴻の 若し家の門に當りて過ぎなば、爲に報げよ 春の眉の結れて開けずと」(春詞二首・三三二頁)も、都を離れた詩人の眉は春になっても開けないで、憂愁に結ばれていることを表している。「先づ三分を飲みて手の熱きに驚く、更に一酌を添へて眉の開くることを覺る」(水邊試飲・三四四頁)は、寒い秋ではあるが酒が進むに連れて、体が温まるだけでなく気持ちも朗らかになることをいう。また、『本朝文粹』には「今春の詔勅哀樂多く、半ば眉開き盡くして半ば叩頭す」(忠信落書・卷十二・奉行文)のように、任官の喜びを露にする詩句が見られる。

以上見てきた日本漢詩文の例について、まず、漢語の「柳眉」に閨怨の「愁眉」の意が含まれることが確認できる。また「眉開」に「心が晴れやかになってほっとする」の意味も男性詩人の詩に見取れる。「柳眉」と「眉開」を組み合せた「柳眉開」は、このような意味の変化の流れにおいては、「愁えに結ばれた眉が開くように、哀愁や危惧が去って安心し、晴れ晴れとした気持ちになる」と読めることは想像に難くない。

三

では、「柳眉開」の用例を検証してみる。

年柳変池台 年柳池台を變へ

隋堤曲直廻	隋堤曲直に廻る
逐浪分陰去	浪を逐ひ陰を分けて去り
迎風帯影来	風を迎へ影を帯びて来る
疎黄一鳥弄	疎黄 一つの鳥弄ひ
半翠幾眉開	半翠 幾つの眉開く
繁雪臨春岸	繁雪 春岸に臨み
参差间早梅	参差 早梅間る

(唐太宗・春池柳)

まず、右の詩以外に、「柳眉開」に似た表現は中国の詩文にほとんど見出されない。詩題から分かるように、この詩は春の池辺の柳を詠むものである。まだ疎らである黄色い枝の上に、一羽の鳥が戯れている。浅い緑色の柳葉が、美人の眉のような芽が所々生えている。岸に植えてある梅の花が早くも綻び、その花びらの上には残雪が煌めいている。唐朝の第二代皇帝李世民のこの「春池柳」詩にある「幾眉開」は柳の芽吹く様子を出している。この詩にある「眉開く」柳は単純な自然風物であり、美女の形容でも人物の心情とも結び付かないものである。

その一方、前掲斎藤氏の論文にも指摘されたように、日本漢詩文については『万葉集』の例がまず挙げられる。

余以暫に松浦の縣に往きて逍遙し、聊かに玉島の潭に臨みて遊覽するに、忽ちに魚を釣る娘子らに値ひぬ。花容雙び無く、光儀匹ひ無し。柳葉を眉の中に開き、桃花を頬の上に發く。意気は雲を凌ぎ、風流は世に絶れたり。

(松浦川に遊ぶ序・万葉集・巻五)

玉島遊覽を下地においた虚構の歌群に先立つこの序は、大伴旅人の作とされ、『遊仙窟』や『文選』の影響が顕著であるこ

とは指摘されている。神女との邂逅を描いた中国の詩文を踏まえて、玉島で出会った娘子達の麗しい顔立ちを漢詩文風に描出しているが、傍線部の「柳葉を眉の中に開き、桃花を頬の上に發く」が原典の『遊仙窟』の「眉上ニハ冬天ニ柳ヲ出シ、頬中ニハ旱地ニ蓮ヲ生ズ」に相似た対句であることが注意を引く(千)。それだけでなく、同じ『遊仙窟』の「翠柳開眉色、紅桃乱臉新(翠の柳は眉の色を開き、紅の桃は臉の新たななるを乱る)」とも酷似する(千)。『遊仙窟』の「眉上冬天出柳」「翠柳開眉色」が崔十娘の可憐な美貌を表すものであるのと同様、傍線部の「柳葉を眉の中に開き」も釣をする娘子達の美貌の喩えである。

次に、菅原道真の師であり、「当代の詩匠」と称えられた島田忠臣の「春風歌」にある「柳眉開」の例をみたい。全詩を左に示す。

風為號令聞先訓
八節周旋皇政媒
加物無偏又無党
施人如去却如来

水池貫玉宛緑酒
肆口吹爐擬暖灰

風は號令たれば 先訓と聞かむ
八節周旋す 皇政の媒
物に加ふるに 偏り無くして又た党無
人に施すに 去るがごとくして却りて
来るがごとし

揺揚日を逐ひては 箕宿に従ひ
養長時に随ひては 震雷に應ふ
就裏三方 意有るに非ず
只だ須らく東のかたより廻るを珍重す
べし

水池玉を貫きて 緑酒を宛へ
肆口爐を吹きて 暖灰を擬ふ

解却畜懷梅脣緩 畜懷を解却すれば 梅脣緩み
消除遺恨柳眉開 遺恨を消除すれば 柳眉開く
絲桐繚繞飛歌樹 絲桐繚繞として歌樹を飛び
羅袖飄飄拂舞臺 羅袖飄飄として舞台を拂ふ
臣過六旬陪五代 臣六旬を過ぐして 五代に陪へしも
春風殊合煦寒栽 春風殊に合す 寒を煦むるの栽と
(春風歌・田氏家集・一四五)

王政の喩えである春風の働きを讃える「春風歌」は、春の宴における君臣和楽の場に相応しい作である。中には、「解却畜懷」の一句は本文の疑問が存するところで(千)、中村璋八・島田伸一郎注『田氏家集全釋』は「解却畜懷梅脣緩」として、「唇のような紅梅も緩み」と解釈し、「柳眉開」を「美しい眉のような柳も葉を広げる」と専ら自然風景と捉えている。また、小島憲之監修『田氏家集注』は「梅兒笑」として、一句を女性の華やいだ様子を想像させる表現と説明した上で、対の表現をなす「消除遺恨柳眉開」を「残る恨みを消し去って、眉のような柳も開きます」と自然風景に結び付いた心情表現として解釈する。このような分岐があることは、「柳眉開」に対する理解の違いを表している、『蜻蛉日記』の侍の歌の場合と同様である。

斎藤氏は、「春風歌」詩の「柳眉開」に前例がないため、「愁眉を開く」意とは言えないことから、侍の歌も心情表現の歌と読めないと述べている。

しかし、人物の心情との結び付きについては、前例がないという理由で簡単に片付けられるだろうか。確かに、「梅脣緩」「梅兒笑」が歌姫・舞妓の様子の見立てであることは後句の「絲桐繚繞として歌樹を飛び、羅袖飄飄として舞台を拂ふ」から想像

できるし、「柳眉」も歌姫・舞妓の麗しい眉の様子と容易に結び付けられることは言うまでもない。ところが、「解却畜懐」と「消除遺恨」はどれも心情を表す語であり、それらに導き出される「梅」と「柳」の組み合わせは、単純に春の自然風物、もしくは背景にぼんやり映し出される美女の容貌とみるのは十分ではないだろう。もちろん、「解却・消除」から、詩人のどのような心情が読み取れるか確認しなければならぬ。

「解却」という語は同じ『田氏家集』の「聴読経」（巻上・十四）にも見られる。

金磬敲来香火薫

金磬敲来 香火薫り

白毫和尚読経文

白毫の和尚 経文を読む

初知解却前途障

初めて知る 前途の障を解却せむとするも

半偈従来難得聞

半偈の従来聞くこと得難きを

右詩の「解却」は「煩惱から離脱する」（中村璋八注）意、あるいは「業障が消えていく」（小島監修・三木雅博注）意と指摘されている。詩人の煩惱とは何だったか。隠逸脱俗志向のある島田忠臣は、一般的に「貧居と閑職に安んずる風格ある文人像」と評される¹⁵が、しかし、その詩文からは、自らの才能が仕途に十分に生かされていないことを託つ一面も窺える。

例えば「官衙分に随ひて閑曹に忝なくす」（「身無繫累」巻中・八〇）には、太宰少弐から帰京して、兵部少輔になるまで散位であったことを「忝い」と言いながらも「閑曹」（重要でない職）というネガティブな言葉で表している。また「若し賢を求むる明聖が日に遭はましかば、廟堂に充滿して竹林空しからまし」（巻下・二〇八）には、竹林七賢になぞらえて、人材を渴

求する聖明な君主に遭えたらと心情を吐露している。さらに、鬱陶しさが解けるのは天子の恩沢・知遇を得ることによるのみと明言しているところにも「解却」に似た「解散」を使っている。

煩襟解散滋恩沢

煩襟の解散せるは恩沢に憑る

不致崎嶇趁逐名

敢へて崎嶇として名を趁逐せず

（「池榭消暑」巻下・一五二）

実際、忠臣と同時期の紀伝道出身者の官歴を調べた滝川幸司氏は、極官から見れば、「同じく紀伝道出身の忠臣にも、さらなる出世の可能性がある」と述べ、忠臣の官途が平凡であったことを指摘¹⁶している。さらに、年齢や出自から見ても近い層にある人物大蔵善行と比べて、忠臣が少外記に任ぜられるまでの五年にわたる長い散位期間は、「忠臣は、善行らと比較すると、儒者、実務官僚としての能力の点で、劣っていたと考えられる」とその理由を求めている。

「春風歌」に戻ってみるが、この詩は忠臣晩年の作である。

その前年の仁和五年（八八九年）に老年の島田忠臣が地方官歴任と数度の散位を経て、ようやく京官の典薬頭を拝した。忠臣の官歴とこれまで見てきた詩作を結合して考えれば、「解却畜懐梅兒笑、消除遺恨柳眉開」は詩人の心情と切り離して解釈するのは無理があろう。

歌姫・舞妓の美貌を背景として溶け込ませ、春の自然風景を前面に描き出しながら、それと渾然一体になったのは、老齢の島田忠臣が「六旬」を過ぎて「五代」の君主の内宴に侍したことを誇らしげに思い、恰も寒さを吹き払う春風に吹かれているような、晴れ晴れとした気持ちではないだろうか。王政の象徴

としての春風に吹かれ、君主の恩沢を浴びている臣下としての自らの心情を、「梅脣緩・柳眉開」と表現していることが看取できる。

このように読めば、「春風歌」詩にある「柳眉開」は、日本漢詩文の文脈においては特異なものであることがわかる。これまでの例のように、単純な自然風物として柳葉が芽吹くことを描出するものでなく、且つ大伴旅人の歌序のように女性の美貌を表すのでもない。この表現は、春の詩的自然風景に、その場にいた美女の麗しい容姿を重ね、さらに自らの心情を融け込ませた、重層的で斬新な表現といえる。「春風歌」において、「春の風景」「その場にいる女性の美貌」「自らの晴れ晴れしい心情」の三つの条件を揃えた「柳眉開」が初めて見られたのである。

四

次の問題は、「春風歌」の「柳眉開」はその後にどのような意で使われるようになったか。まず、前述した通り忠臣の弟子である菅原道真が「眉開」を多用した。『菅家文章』に「翠黛眉開きて 纔に書き出す、金絲繭を結び 繰り將らず」(賦新煙催柳色・巻六・四三八・四四八頁)の詩句がある。川口久雄氏は、「翠黛」は白詩の「昭君村の柳は眉よりも翠なり」(和漢朗詠集・巻上・一〇四)を踏まえ、浅緑の新柳は「美人が愁えの眉をひらいて、みどりのまゆずみをえがきあげたばかりのところ」に喩えられると指摘した。また、詩題の「賦新煙催柳色」については、「内宴に教坊の舞妓の艶色を柳に寄せて讚える意もこもっている」と解している。そうすれば、「翠黛眉開

き」は「柳の眉開く」ことをいうのであり、翠柳の姿に美人の愁眉を開く様子が重なっている点は「春の景物」「美貌の比喩」の二要素を含む。さらに、「翠黛眉開き」の直前に「花なくして舞妓 怨みを含まむことを欲りす」(川口注・柳に花の紅がないから、舞妓はそれをうらみに思うかもしれない)とあるため、「愁えの眉開く」ように芽づく柳は、舞妓の心情を代弁しているときえ読める。「春風歌」は寛平二年の内宴で詠まれたもので、道真は師の詩を知らない可能性が低い。七年後の道真の陪宴詩は詩人自らの気持ちこそ詠み込んでいないが、「柳眉開く」の例として、自然描写に「美人の愁眉が開く」の意を重ねたものと確認できる。また、時代はやや下るが、平安時代の知識人の陪宴詩にもほかの類例が見出される。

為政携書而疲学路 為政 書を携へて学路に疲れ

眉吊而泣史途 眉を吊るして 史途に泣く

適縁桃顔之勸醉 適に桃顔がこれ酔を勧むるに縁しながひ

聊開柳眉之成顰 聊か柳眉の顰むをなすを開く

今蒙大王之新辟 今大王の新辟を蒙り

猥献小子之蕪詞 猥たゞりに小子の蕪詞を献す

(本朝統文粹巻九・善滋為政・七言暮春侍御史大王書閣同賦花開皆錦繡應教詩一首以風為韻并序)

右の詩の作者、善滋為政(元の名は慶滋為政)の父親は慶滋保胤の弟、文章博士の慶滋保章である。為政も外記、式部少輔、内蔵権頭を経て、文章博士を本官とした文人官吏であり、藤原実資に仕えていた^(十一)。右は春の宴に招かれ、主人の求めに応じて作った詩とその序である。善滋為政の生歿年は不明であるが、彼が紀伝道の最終試験である方略試に及第した長徳四年(九

九八年）は、『蜻蛉日記』の作者道綱母が亡くなった三年後である。時代が前後することはさておいて、「書を携へて学路に疲れ」と「眉を吊るして吏途に泣く」^{十七}表現は「眉」関係で目を引く。一聯は宴席の場の辞令的な表現ともとれるが、その

根底には、平安官人社会に身をおく文人達が抱く、藤原氏の専制下の前途に対する漠然とした悲観も読み取れなくはない。直後の「桃顔」とは酒を持つてくる侍女の容貌を指す言葉であるが、「柳眉之成顰」は「桃顔」とは主語が異なり、詩人自身の表情にほかならない。従って、「開柳眉」とは侍女に勧められたまま酒を飲んで、気持ちが朗らかになって顰めた眉も開いたということである。「眉を吊るして吏途に泣く」に続いて「開柳眉」も「春風歌」と同様、男性官人本人の眉を指して、詩人の心情を表していることは明白である。

この詩序にも「暮春の風景」「桃のような顔を持つ美しい女性」「男性自らの心情変化に従い、眉が開く」の三要素が揃っており、前出の島田忠臣詩と趣が頗る通じている。

さらに次のような詩作がある。

灼灼桃花何有因

唯依勸酌勸蕩精神

紅顔易借成蹊処

藍尾被催傍岸辰

梅口争呼頻酌暮

柳眉難展独醒春

西郊遥訪蘭亭会

曲水遺流觴詠新

灼灼たる桃花何ぞ因有らむ

唯酔を勧むるに依りて精神を蕩かすのみ

紅顔は借り易し成蹊の処

藍尾は催さる傍岸の辰

梅口呼ぶを争ひ頻りに酌みし暮

柳眉展き難く独り醒めし春

西郊遙かに訪ぬ蘭亭の会

曲水の遺流觴詠は新たなり

（桃花唯勸醉十二首・加賀少掾菅原清能・

『中右記部類紙背漢詩集』卷十・四七）

永長二年（一〇九七年）春の曲水の宴の様子を描写している詩である。中村璋八・伊野弘子訳注『中右記部類紙背漢詩集』によれば、この宴は列席者が老年の文章博士菅原在良等以外に若者も参加し、氏族と年齢を問わず、比較的自由に作詩していた。「梅口呼ぶを争ひ頻りに酌みし暮、柳眉展き難く独り醒めし春」については、「みんな」梅のような口でお互い呼び合つて、しきりに酒を酌み交わしている賑やかな光景を描出したうえで、「私は眉を開けないで（眉間にしわを寄せ）一人醒めてしまっています」の意と解している^{十七}。

「梅口」「柳眉」の一聯の前は、鮮やかに咲く桃の木の下に人々が寄つてきて自然にできた小道、つまり「成蹊の処」で、「藍尾」（饗宴の席で、順々に杯を回し、最後の者が三杯連飲すること）が行われる情景を詠んでいる。「藍尾」と対をなすのは「紅顔」で、それは「梅口」（梅のような赤い口もと）と共に美人を聯想させる表現である（中村注では美少年とされている）。この宴の場には、「灼灼」たる桃花に、同じ春の風景としての柳の枝葉が配置されていることが容易に想像され、酒を酌み交わす美人の容姿も確認できる。「柳眉展き難く」で「独り醒め」ているのは、作者であり、文章博士在良の息子の菅原清能である。中村注によれば、詩人が独り愁眉を顰めている理由には「作詩がうまくいかない」ことである。そうすれば、「柳眉展き難く」一句は、人々が酒に酔いつつ笑い興じて、かの立派な「蘭亭の会」をも思わせる賑やかな場に居ても、酒を樂しめず塞ぎこんだ詩人の心情を表している。

以上見てきたように、「春風歌」と善滋為政、菅原清能の侍宴詩には共通性を見出すことができる。その共通性は「柳眉開」には自然風景としての「柳芽(葉)」と、美人の「柳葉」のような眉、そして愁いが去って気持ちが晴れる「眉開」の三要素が揃っていることである。この表現は、麗らかな春の風景と美人の美貌の見立てと、詩人の心情変化を融合させたというところで創新的、意図的であるといえる。

五

さて、『蜻蛉日記』に戻りたい。道綱母邸で小弓の練習をした兼家の侍たちに、道綱母側の侍女が弓の名人「養由基」の故事を踏まえつつ、三月の春風景に相応しい青柳の枝に歌を付けて送った。たくさんの返歌の中から「かずかずに」の歌だけが選ばれ記されている。この歌は、自然物の「柳の枝」に、侍女たちの容貌を讃える「柳眉」を重ねて表現したことは夙に指摘されてきた。しかし、「柳のまゆぞひらくる」という和文や歌にみられない表現の解釈にはまだ定説が見出せない。その一説として、和歌の伝統から見て、侍女贈歌の「この春の柳の糸」に引かれて、「柳のまゆひらくる」には、掛詞の「繭」や「糸」の縁語「繰る」の要素を考えて、一首を春の自然風景を詠み込んだ儀礼的な返歌とみる。

一方、漢語「柳眉」から「柳の眉も今ぞ開くる」と読む意見もあり、この歌に侍が自らの心情を表しているとみている。斎藤氏が指摘し、本稿であらためて確認したように、漢詩文の伝統に従えば、「柳の眉」は侍女(美女)の眉の美しさというの

は一般的である。そのため、「かずかずに君かたよりの」の「君」は侍女たちのことをいってから、その後「侍女たちの眉が開く」となっては文脈上理解しにくい難点がある。上村悦子氏注にあるように、「柳眉」の主語を侍とみて、「私たち(侍達)の愁眉が開く」とみるのは頷けるが、「柳眉」が男性に使われる理由が説明されていない。

このように、漢詩文の伝統から見て「柳眉」が男性の(殊に歌の作者の)眉を指す前例がないことや、「柳眉開く」に「愁眉が開く」の意を持つ用例がないことが問題であるが、これについては、「春風歌」をはじめ、春の宴に侍した文人官吏の漢詩を視野に入れば問題とはならない。侍の返歌において、手紙に付けられた柳の葉、侍女たちの美貌を象徴する「柳眉」、気持ちの晴れるという心情表現の「眉開く」と、三つの要素を揃えもつところは、文人官吏の侍宴詩にある「柳眉開」の用法と酷似すると言わざるを得ない。一首は、道綱母側の侍女に最厚されて、後手組ではあるが、勝てそうな気持ちになって心も晴れたという意と解釈できる。

しかしここで、儀礼的な挨拶歌とは片付けられない、兼家側の侍の心情を詠み込んだこの歌がなぜ選ばれて記されたのか、という疑問が生まれる。

この問題を考えるには、該当記事の直後に起きた安和の変(源高明の左遷)についての記述が示唆的であろう。「身の上のみする日記には入るまじきことなれども、悲しと思ひ入りしも誰ならねば、記しおくなり」(安和二年三月)と道綱母自ら表白しているように、一人称を軸としている日記の中で、なぜ作者以外の記事、それも他者の心情を表す歌が必要だったのかに

ついでには容易に看過できない問題である。日記に多数見られる他者の歌、特に上・中巻における周辺人物の歌については、従来は私歌集的であり、上流貴族社会との交流を描くといった外在的な要因を見出すものとされてきた^{千五}。一方で、外的要因に包括できない他者の歌の意味と役割は、「周辺からあぶりだされる不幸を一層強調する」、あるいは「自己の幸福が他者詠によつてあぶり出される」との特色を持つていることも指摘されている^{千七}。つまり、日記における他者の歌は、親族や上流貴族との交流か、自らの幸・不幸な心情を強調するものかといった範疇からほぼ外れない。「かずかずに」の歌は、身分の低い従者の詠であり、儀礼的で道綱母の愛憎とも無関係なものであれば、なぜ記さなければならなかったのか。

「かずかずに」歌の直前の記事も引いてみる。

三月三日、節供などものしたるを、人なくてさうごうしとて、ここの人々、かしこの侍に、かう書きてやるめり。

たはぶれに、

桃の花すきものどもを西王がそのわたりまで尋ねにぞやる

すなはちかい連れて来たり。おろし出だし、酒飲みなどしと暮らしつ。

(安和二年三月・一七一頁)

同じ月の出来事として、侍女の歌に誘われて、侍達が道綱母邸にやつてきて酒宴を楽しんだことが記されている。上巻にも、桃の節供の翌日になって訪れた兼家と道綱母の姉の夫である為雅の応酬歌に西王母の故事が踏まえられているが、桃に因んだその故事を詠み込んだ侍女の歌を受けて、侍達は直接来訪する

ことをもつて返した。その直後に、小弓の練習でこの侍達が道綱母邸を再訪する。侍が引き続き道綱母邸に赴くこととその場で詠まれた歌を記すのは、単なる記録的行為であつたらうか。

先述したように、「春風歌」とその後の詩文は、文人官吏が仕えている主人の邸宅に招かれ、美しい侍女の招待によつて心の蟠りが消え、その喜び(主の厚情への感謝の意)を示す文脈を持つている。道綱母邸で行われた桃の酒宴と弓の練習の記事についてみても、兼家側の侍達が「女主人(事実はともかく)」の邸宅に招かれ、その侍女たちにもてなされ、気持ち晴れたことを歌に詠んで感謝を示す文脈を構成しているように見える。(主人邸の行事↓侍女に歓待される↓下部の気持ち晴れを晴れになる)このような構図は、「春風歌」と同様な流れを見せている。

道綱母が、兼家側の侍の歌がもし単なる儀礼的な挨拶歌として受け取つたのであれば、ほかの「忘るるほど」のものと同様、日記に記す価値を見出せなかつただろう。忠臣の「春風歌」をも想起させる「柳眉開」の表現こそ、彼女の心の琴線に触れていたものとは考えられないだろうか。

深読みでなければ、「春風歌」の作詩事情と照合して、侍の歌にも主従関係が仄めかされることになると考えられる。一見儀礼的な応酬ではあるが、兼家に仕える身分の侍の口から、道綱母が女主人に等しい意味を含めた歌が詠まれているようである。道綱母にとつて、それがどうしても捨てがたいものであつたのかもしれない。

道綱母が島田忠臣の「春風歌」を知っていたかは定かではないが、上巻には「夜なごうしてねぶることなければ」のように、

漢詩文を訓読調のまま和文に溶け込ませている点から見ても、前掲の石原氏の論文にも指摘されたように、文章道を生きた父や兄との贈答歌や日常生活の中で、漢詩文を交えた会話が交わされたであろうし、父兄の漢詩文朗詠を憶えていた可能性も大いにある。現に、道綱母の父親藤原倫寧は、碩儒源順と連名して属した「申受領文」が『本朝文粹』に収められた文人官吏である。菅原道真も師として仰いた島田忠臣の詩を、倫寧が知っている可能性が十分にあり、それに道綱母が何らかの形で触れたとしてもおかしくない。

また、善滋為政と道綱母とは直接関係が見出されないが、彼が仕えていた藤原実資と道綱は競争相手であり、実資が道綱を「一文不通の人」（小右記）と罵倒したのは有名な話である。道綱母と姻戚関係にある藤原文範が建立した普門寺を後援したのも実資である²¹⁷。道綱母が姉の夫であり、文範の次男為雅と同行した普門寺経供養のかえりに、小野山荘に立ち寄り詠んだ歌「薪こることは昨日に尽きにしをいざをの柄にここに朽たさん」（巻末歌集・三七五頁）も「爛柯」の故事を引いた漢詩文の影響が濃厚なものである。

このように、道綱母と彼女の身辺の知識人層にしてみれば、島田忠臣や善滋為政詩の真意は容易に理解できたであろう。「かずかずに」の歌は、侍の作にして儀礼的な挨拶歌というより、女主人の歓待と優遇に対する謝意を表すもので、道綱母にとって大変都合のよい素材ではなかっただろうか。この歌を記す行為には、道綱母が妻の立場を確認・強調するような作意がまったく内包されていないともいえないようである。

以上「かずかずに」の歌について、和漢それぞれの文脈を遡ってみてきた。本稿では、歌語の「柳のまゆ」にも漢語の「柳眉」にも見い出せない「柳眉開」の独特な用法は、島田忠臣の「春風歌」がその初出であることを確認した。この「柳眉開」は、春風景の柳の枝葉と、侍女の美しい眉、自らの心情変化の三要素を有している重層的表現である。その類例は善滋為政や菅原清能の侍宴詩に散見されることから、道綱母が生きた時代の前後の文人官人に理解されていたことがわかる。日記中巻の侍の歌は、今まで自然風景の描出と侍女への辞令的賛美など、技巧的・修辭的に見られてきたが、日本漢詩文における漢語表現の受容・変容の流れの中においてはじめて理解することが可能となろう。

また、この歌が侍の歌として日記に記された意味についても検討した。すでに指摘されたように、『蜻蛉日記』にみられる他者詠は、ほとんど肉親との交流もしくは上流貴族達との応酬歌であり、また道綱母の心情を傍らから証言するような内容のみ組み込まれている。それらのいずれにも該当しない、侍女と従者との間の応酬歌は異質に感じられる。しかし、「春風歌」とその後の陪宴詩の「柳眉開」が君主・主人邸に招かれ、もてなされた喜びの表出であることを踏まえていけば、この侍の歌を記すことは、道綱母が女主人としての立場を確認・強調する含みがあり、「自己の幸福が他者詠によつてあぶり出される」内容の一つとして読み取れなくはない。

最後に一つの疑問が残る。侍の歌を、道綱母自身も「口々し

たれど、忘るるほどおしはからなむ」と酷評しているが、この「かずかず」の歌はあまりにもかけ離れているほど高度な素養と才覚を見せている。そもそも弓に長けた従者が、詩匠である島田忠臣の「春風歌」の知識を持つていたとみるべきであろうか。

『伊勢物語』（一〇七段）に、主が歌のうまく詠めない女のために、代わりに歌を詠んで清書させたという有名な話がある。断定はできないが、『漢武帝内伝』で伝わる西王母の故事を詠み込んだ侍女の歌も、あるいは道綱母の指導下で詠まれたものかもしれない。兼家の侍の歌も、双方の主人の影響が全くないとは言い切れないだろう。とはいえ、日記にどれほどの虚構が含まれるのか、あるいは執筆時にどれほど意図的な作意が存在したのかについては確証がない。基本的には事実を筆録するという規定を有する日記の作者と、実体験を素材にして別の生を作り出す物語の作者との間で、道綱母がどのような揺らぎを見せているかは、主題と形態が複雑に絡み合う大変難しい問題である。侍の歌の作歌事情を明らかにすることができれば、あるいはこの問題を探るための一つの可能性が唆されると考えられる。

[注]

(一) 道綱母の漢詩文素養については、坂徹の『かげろふ日記解環』が契沖の考証を多く受けて、昭和に入ってから本格的な研究が始まる。多数の先学の成果は、川口久雄『かげろふ日記』（日本古典文学大系）・今西祐一郎『蜻蛉日記』（新日本古典文学大系）等に詳しい。また、漢詩文との関係に着眼した主要論文を左に掲げ

る。

品川和子「蜻蛉日記と漢詩文の関係について」『学苑』二八七号・一九六三年十一月・『蜻蛉日記の世界形成』武蔵野書院・一九九〇年所収

木村正中「蜻蛉日記の形成」『国文学・解釈と教材の研究』十卷十四号・一九六五年十二月

目加田さくを「かげろふの日記を支えるもの」『論叢王朝文学』笠間書院・一九七八年所収

矢作武「蜻蛉日記と漢詩文」『一冊の講座・蜻蛉日記』有精堂・一九八一年所収

伊牟田経久「蜻蛉日記と漢詩文」『古典の変容と新生』明治書院・一九八四年所収

神谷かをる「女流日記と漢詩文」『光華女子大学研究紀要』三十号・一九九二年十二月

石原昭平「女流日記と漢詩文——蜻蛉日記前後と父子同邸・朗詠などを中心に——」『中央大学文学部紀要』一五二号・一九九四年三月

斎藤菜穂子「蜻蛉日記下巻における漢文的表現——兼家との関係の相対化へ——」『蜻蛉日記研究・作品形成と「書く」こと』武蔵野書院・二〇一一年所収

小山香織「蜻蛉日記下巻冒頭の表現——漢詩文引用による自然叙述性と日録性——」『中古文学』七十二号・二〇〇三年十一月

大谷雅夫「蜻蛉日記と漢文学」『詩と歌のあいだ』岩波書店・二〇〇八年所収

(二) 拙稿「蜻蛉日記と漢詩文・源氏物語へ」『東アジア比較文化研究』十一号・二〇一二年六月

(三) 本稿が参照した『蜻蛉日記』の注釈書は以下である。

川口久雄注『日本古典文学大系二〇』(岩波書店・一九五七年)

大西善明注『蜻蛉日記新注釈』(明治書院・一九七一年)

木村正中・伊牟田経久注『日本古典文学全集九』(小学館・一九七三年)

大養廉注『新潮日本古典集成五十四』(新潮社・一九八二年)

今西祐一郎注『新日本古典文学大系二四』(岩波書店・一九八九
年)

木村正中・伊牟田経久注『新編日本古典文学全集十三』(小学館
・一九九五年)

なお『蜻蛉日記』の本文引用は木村正中・伊牟田経久注『新編日
本古典文学全集十三』(小学館・一九九五年)に拠る。

(四) 上村悦子『蜻蛉日記解釈大成 第3巻』(明治書院・一九八
七年)

(五) 斎藤菜穂子『『蜻蛉日記』中巻の「柳の糸」と「柳のまゆ」の
贈答歌考——「眉」と「繭」の掛詞をめぐって——』『國學院大
學紀要』五〇巻・二〇一二年)

(六) 『新潮日本古典集成 枕草子下』(新潮社・二八二段、二三三頁)
なお当該歌は清少納言の家集には見えない。

(七) 和歌の引用は『新編国歌大観』(角川書店・一九八三年)に拠
る。歌集名・歌番号もそれに従った。中国漢詩文の引用は文淵閣
四庫全書電子版(上海人民出版社・二〇〇二年)に拠り、私に読
み下し文を付した。特別断っていない場合、日本漢詩文の読み下
しと解釈は以下の注釈書に拠る。

懷風藻 小島憲之校注『日本古典文学大系六九』(岩波書店・一
九六四年)

文華秀麗集 小島憲之校注『日本古典文学大系六九』(岩波書店
・一九六四年)

(八) 形容女子細長秀美的眉毛 『大辞海』上海辞書出版社・二〇〇
九年

柳眉、柳の葉のように細く美しい眉。『広辞苑第六版』岩波書店
・二〇〇八年)

柳眉、やなぎの葉のようにほっそりした美しいまゆ。美人のまゆ
の形容。『大漢和辞典 修訂第二版』大修館書店・一九八九年、
一九九〇年)

柳の葉のように細くて美しい眉。美人の眉にたとえていう語。柳
の眉(『日本国語大辞典第二版』小学館・二〇〇〇年、二〇〇二
年)

①柳の葉、特に萌え出たばかりの新葉を眉に見立てた語。②柳の
葉に似た、ほっそりした美しい眉。漢語「柳眉」によるもので、
美人の形容の一。『角川古語大辞典』角川書店・一九八二年、一
九九九年)

『角川古語大辞典』を除いて、①の意味が載っていないほうが一
般的である。

(九) 菅原道真詩の引用は川口久雄校注『日本古典文学大系七二 菅
家文章・菅家後集』(岩波書店・一九六六年)による。解釈も同
書に参照した。

(十) 青木生子・井手至等注『新潮日本古典集成 萬葉集二』(新潮
社・七三頁頭注)

(十一) 小島憲之・木下正俊等注『日本古典文学全集七 萬葉集二』
(小学館・五一頁頭注)

(十二) 塙保己一編『群書類従』第九輯 文筆部 卷百三十(八木書店・二〇一四年)には、「解却音懷梅只爰」とある。中村璋八・

島田伸一郎著『田氏家集全釋』(汲古書院・一九九三年)では「梅脣緩」と校訂されているが、小島憲之監修『田氏家集注 卷之下』

(和泉書院・一九九四年)では「梅兒笑」としている。いずれにしても「梅」と「柳」が対をなす自然風物であることはみな共通するが、「梅脣緩」と「梅兒笑」は花の咲く様子を美人の顔に見立て梅を擬人化して、歌姫・舞妓の姿を彷彿させる点で後句の「糸桐繚繞」として歌樹を飛び、羅神飄飄として舞台を払ふ」への繋がりがいとおもわれる。

なお『田氏家集』の引用と読み下し文は中村璋八・島田伸一郎『田氏家集全釋』に拠る。

(十三) 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究上』(明治書院・一九六〇年)

(十四) 滝川幸司「島田忠臣の位置」(『中古文学』八九卷・二〇一二年六月)

(十五) 『日本人名大辞典』(講談社・二〇〇一年)

(十六) 金澤文庫本を底本とする『正統本朝文料 全』(國書刊行會編・一九一八年)には「為政書携書而疲学路、眉吊而泣吏途」と

あるが、菅原徳長(東城坊徳長)が印行した活字本を参照した『校註日本文學大系 第二四卷 本朝続文粹』(國民圖書株式會社編・一九二七年)には「負予而泥吏途」とある。いずれにしても詩人の心情表現であることは変わらない。

(十七) 中村璋八・伊野弘子訳注『中右記部類紙背漢詩集』(汲古書院・二〇一一年)

(十八) 水野隆「蜻蛉日記上巻の成立過程に関する試論」(『論叢王朝文学』笠間書院・一九七八年十二月)

(十九) 川村裕子「蜻蛉日記上巻における他者詠」(『活水日文』三十五号・一九九七年十二月)

(二十) 佐々木令信「比叡西山麓普門寺私考——平安時代中期草創寺院の一視点——」(『仏教史学研究』二四卷二号・一九八一年三月)

[付記]

本稿は著者が平成二六年度に京都大学文学研究科へ提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。

(ちょうりょう 昭和女子大学国際学部国際学科非常勤講師)